

令和5年度 自己評価結果

認定こども園土崎幼稚園

A：よい B：おおむねよい C：やや不十分（検討を要する） D：不十分（改善を要する）

評価領域	取組状況	評価
1：教育・保育目標について （7観点評価）	夏休みまでを前期、冬休みまでを後期として年2回、職員による自己評価と協議を行ってきたことにより、教育目標や経営の重点について全職員が共通理解し、すべての観点で肯定的な評価100%となった。新たな保育教諭を3名迎えたが、目指す子どもの姿と課題を具体化しながら教育・保育に取り組むことができた。	A
2：教育週数と時間、行事について （6観点評価）	教育週数40週以上を確保し、「教育及び保育の内容に関する全体的な計画」、「教育・保育課程」に計画していた教育・保育内容を全て実施することができた。また、これまでの感染予防対策の経験を生かしながら実施方法を工夫してきたことにより、園内外の行事や保護者参観を全て実施することができた。 保護者アンケートからも行事等が充実してきていると言えるが、保育者の仕事の効率化や精選を図っていかなければならない。	A
3：学年・学級経営について （12観点評価）	健康観察やあいさつ、笑顔での保育については、ほとんどの職員がA評価であった。今後、園児数と職員数が増えてきたことを考慮して、情報交換の時間をしっかりと確保すること等により、子どもの内面や行動の背景にある要因の理解や、特別な配慮を要する子どもの「指導計画」や「支援計画」の手立てをもっと具体化していく必要がある。チームによる教育・保育の充実を図っていきたい。	A
4：教育・保育の在り方と保育記録について （10観点評価）	10観点中、6観点は肯定的評価が100%であったが、その中で、保育の記録が日々の実践に役立つものにしていきたいという意見があった。週案の形式の見直しを図るとともに、園児が主体的に関わりたくなるような環境構成や教材・教具の工夫に取り組んでいく必要がある。 異年齢交流については、肯定的評価が95.2%であったが、来年度からの3歳未満児の保育を開始することも踏まえて、計画の見直しと実践の充実を図っていく必要がある。	B
5：組織・運営について （7観点評価）	協働により全職員が園の運営にかかわり、教育・保育の質の向上に努めることができた。課題であった各種会議の適切かつ効率的な開催については、協議が必要な内容と確認だけでよい内容を明確にしてきたことにより、肯定的評価が昨年度の94%から95%となった。引き続き、経験年数の異なる教職員が相互に助言し合いながら知恵を出し合い、教育・保育の質の向上に取り組んでいく必要がある。	B

評価領域	取組状況	評価
6：保健・安全指導と安全管理について (9 観点評価)	<p>9 観点すべてが 100 % の肯定的評価であった。コロナ禍で経験した手洗いや手指消毒、必要に応じたマスクの着用等の保健指導や常時換気などの感染予防対策により、広くインフルエンザ等の感染症の感染拡大をも防ぐことができた。</p> <p>ヒヤリハット記入簿による情報共有や様々な状況を想定しての避難訓練や臨港署に協力要請しての不審者対応訓練、エピペンや AED の研修が効果的であったという意見が出された。</p>	A
7：園内外の研究・研修について (6 観点評価)	<p>6 観点すべてが 100 % の肯定的評価であった。研修リーダーが掲げた研修 3 箇条「領きの気持ち」「言っている」「間違いはない」により、活気ある話し合いを通して、教師間の親密度を高めて同僚性を育む園内研修とすることができた。来年度は、初任者や新規採用者により、若い保育者が増える予定である。今後も同僚性を育みながら、経験年数の少ない保育者の課題や疑問に答える短い協議を積み重ねていく必要がある。</p>	B°
8：幼保小との連携について (4 観点評価)	<p>新型コロナ感染症が 5 類に移行したことにより、小学校の体験入学、保育園との交流等が再開され始めた。感染予防対策をしての小学校の授業参観や教員間の情報交換会は予定通り行うことができた。土崎小学校と土崎南小学校の統合が 2 年後となったことを契機に両校と近隣園による幼保小連携として、子どもや職員の交流を図っていくことを計画することができた。</p>	B
9：家庭・地域社会との連携について (7 観点評価)	<p>保護者への「利用者アンケート」では、全 14 項目において 100 % の肯定的評価であった。また、11 項目において「とてもそう思う」が 3～17 % 増え、「お子さんは幼稚園に楽しく通っている」という項目については 91 % (+10 % 増) の保護者が「とてもそう思う」と回答した。また、52 名の方からは温かい応援メッセージをいただいた。このことは保育者が笑顔で日々の連携を積み重ねてきたことによるものと考えられる。</p> <p>中央教育事務所や療育センターなどの専門機関との連携を図ってきたことにより、特別な配慮を要する子どもへの支援を充実させることができた。</p> <p>子育て支援として行っている園開放では、少人数であることで温かく落ち着いた雰囲気の中で交流ができた。加えて、来年度からの未満児保育開始に対応したカリキュラムを計画することができた。</p> <p>今年度も子ども曳山の町内巡行を行い、地域文化に親しむとともに、地域の方々から支えられていることを実感し、地域を大切に思う心を育てるよい経験ができた。子ども用曳山をご寄付いただいたことを糧に、今後は地域の人たちと交流する園外活動を増やし、地域の方々にも共に育てていくという意識を醸成していきたい。</p>	B°